

# ブロック・ミラーのワイルド・ツアー

ー 漁業との接合に関する社会学・人類学的予備考察

立川 陽仁 ・ 吉村 真衣

三重大学人文学部文化学科『人文論叢』第42号 別刷

2025年3月 発行

# ブロック・ミラーのワイルド・ツアー

## ー 漁業との接合に関する社会学・人類学的予備考察

立川 陽仁（三重大学）・吉村 真衣（名古屋大学）

**要旨：**本研究ノートは、カナダ、太平洋沿岸にてクジラやシャチを観光客に見せるワイルド・ツアーを営むブロック・ミラー氏のツアーの内容を詳細に紹介し、そのうえで彼がおこなう事業（観光業）と彼がかつておこなっていた漁業とがいかに接合されているか、近年の環境の変化が彼のビジネスにどう影響しているかを社会学・人類学的視点から分析する中間報告である。

### 1 はじめに

カナダの太平洋沿岸はさまざまな野生動物の宝庫であり、現地では比較的早い時期からホエール・ウォッチング・ツアーなどの、いわゆるワイルド・ツアーないしエコ・ツアーと呼ばれる観光業が導入されていた。本稿でとりあげるブロック・ミラー（仮名）のツアーもそのひとつである。ミラーは元サケ漁師であるが、1990年代に始まるサケの緩やかな減少、およびそれに伴うカナダ政府によるライセンス払い戻し政策を機に、漁師を引退し、先住民パートナーとともにカルチュラル&ワイルド・ツアーを開始した。ミラーの説明によると、これが1997年のことだと思われる。また、HPによれば、ミラーのツアーは地域でもっとも古いもののようだ。現在、彼のパートナーは病のためカルチュラル・ツアーから撤退しており、ミラーは1人でワイルド・ツアーのみを営んでいる。

上記の背景をふまえると、ミラーが営むワイルド・ツアーは、いわば元漁師がおこなう観光ツアーだということがわかる。そこで本稿では、ミラーが実際に営んでいるツアーを題材に、おもに以下2つの点に注目しながら分析しようと思う。第1に、元漁師であるミラーがワイルド・ツアーを営むにあたり、漁師としての経験や漁師ネットワークをツアーに生かせるのかという点。この点は、漁業と観光業がどう接続できるかという問題に連なる。第2に、カナダ太平洋沿岸でも間違いなく進行している自然環境の変化が、彼のツアーにいかなる影響を与えているのかという点である。ワイルド・ツアー業は自然や生態を資本として利用するので、自然環境の変化は彼らの産業に少なからず影響を及ぼす。現時点でその影響がどうなっているのか。本稿はこれら2つの点を社会学・人類学的な視点から分析していく。

なお、本稿では序論部となる「はじめに」の部分と第3節の1の部分而立川が、ミラーのツアーの事例からなる次節と第3節の2の部分および結論部となる「終わりに」の部分を吉村が担当して執筆する。

### 2 ミラーのワイルド・ツアー

#### 2-1 ツアーの概要

ツアーの拠点となるキャンベル・リバー市は、ブリティッシュ・コロンビア州の太平洋岸に

あるバンクーバー島東岸中部域にある人口3万人ほどの町で、ディスカバリー海路（Discovery Passage）に面している。ミラーの事務所と船は市北部のディスカバリー・ハーバー・センターというショッピングモールに隣接したディスカバリー・ハーバー・マリーナ（通称マリーナ）というデッキにあり、ツアーはそこからディスカバリー海路に出てクジラやシャチ、その他の野生生物を観察、撮影するというものである。ツアーのHPには以下の文言がある。なお、本来なら出典先のURLを付すべきところだが、匿名にしているためURLは付さないことにする。

シャチやザトウクジラ（Humpback Whale、以下本文中では単に「クジラ」と記す）をはじめ、イルカ、ブラック・ベアー、ワシ、アザラシ、アシカなどの海洋生物を探します。本土の河口や海岸線沿いでグリズリー・ベアーを見かけることもあります。近年、このエリアでザトウクジラを見かけることが多くなりました。クジラが大好きなオキアミやニシンが大量に捕れるようになったからです。どのツアーでもクジラをほぼ確実に見ることはできますが、もちろん自然界に保証はありません。

この周辺には、ディスカバリー海路、ジョンストン海峡（Johnstone Strait）、デソレーション海峡（Desolation Sound）、最近セイリッシュ海（Salish Sea）と改名されたジョージア海峡（Georgia Strait）など、探検できる海峡がたくさんあります。さらに、この地域には世界で最も強力な海流があり、これもまた見ものです。そびえ立つ山々や氷河のフィヨルド、緑豊かな熱帯雨林、流れ落ちる滝もこの地域にあります。また、この地域で生まれたガイドから、この地域の歴史についても学ぶことができます。

ツアーは例年4月1日から10月30日まで催行される。少人数制で8～10名がミラーの船に乗り合わせる。追加料金を支払えばパーソナル・ツアーにも対応している。3.5時間コース（月曜～木曜、169カナダドル、以下の通貨単位はすべてこれと同じ）と5時間コース（土曜、209ドル）があり、筆者らは2022年10月に3.5時間コースに参加した。後に示すように、彼のツアーはキャンベル・リバー発着の同種のツアーに比べ、時間が若干短く、価格帯も低めである。

当日のツアーの予定ルートは図1の通りである。11時頃に地点A（マリーナ）を出港し、クアドラ島南東岸の地点Bにてクジラの観察をする。その後地点Cのセイリッシュ海まで南下したのち、再びクジラなどの野生生物を観察する。帰りに地点Dのミトレナッチ島に立ち寄り、近年カリフォルニア湾から北上して常駐しているカリフォルニアアシカ（California Sealion、以下単に「アシカ」と記す）の群れを見て地点Aに戻るというものである。これを3.5時間でおこなう。もっとも、後述するように、当日はこの後に別の行程が加わったため、所要時間もツアー価格も変更があった。

筆者らは当初、ホマルコ（Homalco）という先住民バンド（コースト・セイリッシュ系の先住民族で、現在キャンベル・リバー南端と大陸側に居留地をもつ、バンドとは行政上の単位）が実施するツアーに参加する予定だった。しかし、ホマルコのツアーを予約しようとしたそのとき、ある知人からミラーのツアーに関する情報を得た。ミラーはこの知人の「親族」（彼らはrelativeとかrelatedと表現する）であった。われわれは、ホマルコのツアーの予約方法が複雑だったこと、ミラーのツアーのほうがホマルコのツアーより安価だったこと、われわれの知人がミラーの人となりをよく知っており、彼の人格に太鼓判を押していたことなどを理由に、

急遽ホマルコではなくミラーのツアーに参加する決定をした。以上がミラーのツアーを選んだ経緯である。

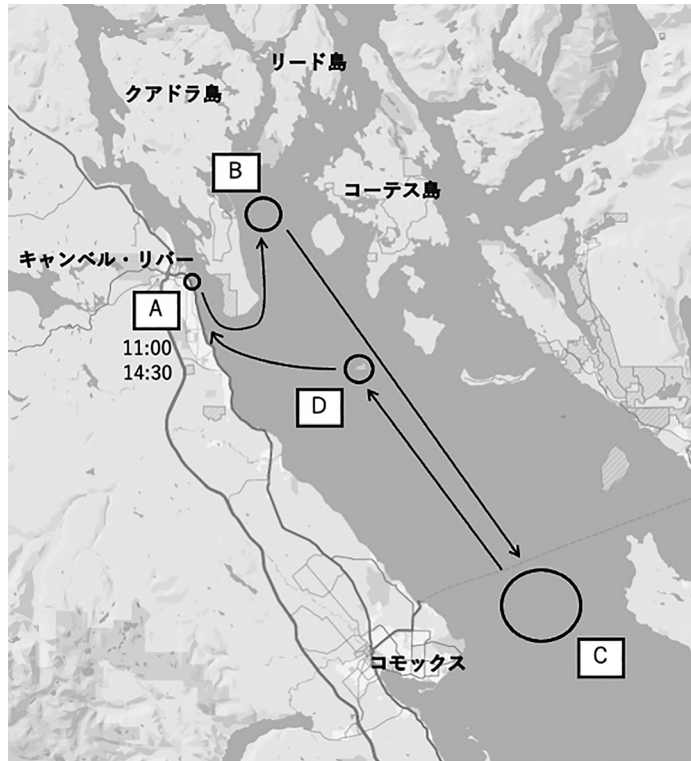


図1 基本的なツアーのルートとスケジュール (Google Map に加筆)

ホマルコ以外にもキャンベル・リバー発着のワイルド・ツアーがいくつか確認できるが、それらと比較すると、いずれもクジラとシャチを観察するツアーは4時間から6時間で、参加費用がだいたい180~220ドルであった。費用の誤差は、ツアーにかかる時間の長さにおおむね比例し、またツアーが飲食代込みかどうかを反映していた。このなかで、ミラーのツアーはもっとも安価な部類に入るが、3時間半というツアー時間の短さをふまえると、時間あたりの単価は他のツアーと大きく変わるものではない。この意味で、ミラーのツアーはこの地域のクジラ、シャチを観察するツアーの典型と考えることもできるだろう。

キャンベル・リバー発着のいくつかのツアー業者のHPを見たところ、どのツアーもセイリッシュ海にてクジラとシャチを観察する航行ルートがある。しかし筆者らがミラーのツアーを利用した際、ツアー中新たに付け加えられた地点(図2の地点E)に到着するまで他の会社のツアー船に遭遇することはなかった。このことから、実際の航行ルートは各ツアー会社によって微妙に異なることがわかる。また(ミラーのツアーが当日そうであったように)同じツアー会社であっても毎日航行ルートが変わり得ることも伺える。

なお、ほとんどの会社がクジラとシャチなど、おもに海から観察可能な動物を見るツアーの形をとっているのに対し、先述のホマルコのツアーでは、北米大陸側のビュート入江(Bute Inlet)

まで移動してそこで上陸し、大陸側にしか生息しないグリズリー・ベアの観察をする行程が含まれている（キャンベル・リバーのあるバンクーバー島にはブラック・ベアしか生息しない）。HPを見る限り、このツアーでもビュート入江に移動する途中のセイリッシュ海でクジラとシャチを見る行程はあるが、文面上その点は強調されず、あくまで猛猛なグリズリー・ベアを安全に観察できる点が強調されている。このツアーは8~9時間所要で約500ドルの費用がかかる。

## 2-2 出発まで

3.5時間コースに参加したわれわれは、朝の10時30分にツアーの事務所に集合した。

事務所のあるマリナには個人もしくは法人所有のクルーザーと小型観光船が並んでおり、漁船はほぼない。そのデッキ沿いにビジネスエリアがあり、プレハブでできた建物が並んでいる。そのほとんどがワイルド・ツアーやフィッシング・ツアー事業者の事務所で、筆者が確認した限りミラーの事務所を含め5軒あった。

われわれが到着した頃、事務所はまだ閉まっており、数名の参加者が外で待っていた。しばらくしてミラーが現れ、受付と支払いを済ませたあと予約人数が揃うまで待機した。事務所のなかには受付カウンター、モニター、ソファ、棚などがあるくらいで、シンプルな作りである。壁にはミラーがツアー中に撮影した野生生物の写真や、先住民のアートなどが掛けられていた。

当日は筆者らを含めて8人が参加した。いずれも夫婦やカップルとみられる2人組で、スイスやドイツなど国外から訪れたことが彼らとミラーとのやりとりからきかれた。全員が集合すると、10時40分頃から、ミラーがモニターを使いながら約10分にわたって自己紹介やツアーの概要の説明をおこなった。

まず自己紹介を箇条書きにすると、次の通りになる。

- ・私はキャンベル・リバーで生まれ育った。本来はある先住民と私がオーナーで、その先住民はカルチュラル・ツアーを、私がワイルド・ツアーを担ってきた。
- ・いつも2人のチームでやってきたが、その先住民パートナーが体調を崩した。しかし私はツアーを続けると決め、トータルで25年間催行してきた。
- ・私は16歳からサケ漁業の漁師になり、46年間海にいる。私のパートナーである先住民の漁師歴は私よりはるかに長い。彼から私はたくさんのことを学んだ。
- ・私たちのサケ漁ではトロール船は使わず（kind of dirty fishery, lots of waste）、とてもクリーンな漁だった。カニ、オヒョウ、サケ、ニシン、タラ、エビなどを捕ってきた。

続いて、ツアーの概要について次のような説明がなされた。

- ・ツアーは海外から客が多い。この日もスイス、ドイツ、日本からの客がいるが、過去にはメキシコやアラスカ、ニュージーランドやオーストラリアからの客もいた。
- ・バンクーバー島と本土（北米大陸）の間には150ほどの島々があり、フィヨルドもある。
- ・このツアーでは基本的に、3.5時間を使ってクルーズをし、見つけたものを見る。主なものの1つがクジラ。冬にはメキシコやハワイなど南方に向かうが、5月頃からこのあたりに現れる。一方でシャチは年中見られる。たまにイルカもいる。

・今日の行程は（モニターの地図を示しながら）南に向かい、コモックス（地名）のあたりで（つまりセイリッシュ海で）クジラなどを見る。見られるものは日によって変わる、昨日見たものを聞かれば答えられるが、今日同じものが見られるわけではない。

モニターに映される地図や野生生物の写真を駆使して約 10 分の説明を終えると、近くのデッキに停泊する船に移動した。

### 2-3 ツアーの状況

以下、当日の実際のツアーの行程を時系列に沿って記述する。以下の記述を見ればわかるように、先述の予定されたルートと実際のルートには違いがある。実際のルートについては図 2 を参照されたい。

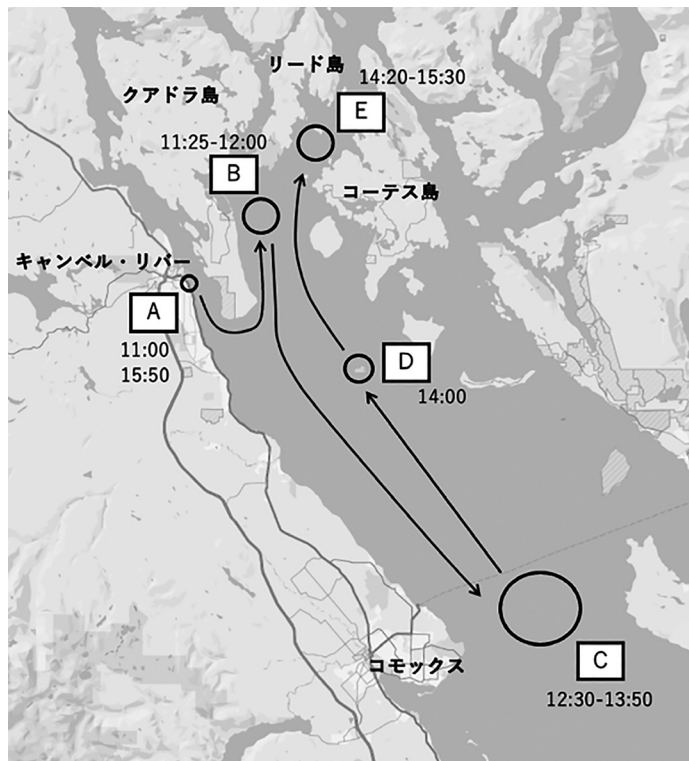


図 2 ツアー当日のルートとスケジュール（Google Map に加筆）

#### 【11 時：出港】

船は最大人数の 10 人が乗れば満席になるようなサイズで、皆が乗り込むと 11 時頃に出港した。ミラーは操縦しながらガイドをし、クジラやシャチを見つけると船を止め、皆でデッキに出て観察や撮影を行う、という流れが繰り返された。

後に詳述していくが、彼のガイドは、彼ひとりによる語りと参加者との会話を通した語りの 2 種類からなる。折に触れて「皆、理解したかな？」と彼が参加者の理解度を確認し、質問が



あると丁寧に答えていた。

ここからはツアーのプロセスを、本論文の問題関心に関連するものに絞り、時系列に沿って記述する。

出港前、船内の設備を説明する際ミラーは寝袋が積んである理由を次のように語った。

寝袋を積むのは漁をやっているときに学んだことだ。漁船にはいつも予備の寝袋を積んでいた。誰かが海に浮かんでいたときに、それを使って引き上げるために。以前私とパートナーは、そうやって2人の漁師を救ったことがある。夜中、漁網修復の作業をしていたときに助けを求める声が聞こえ、よく見ると沈没した船と漁師2人がいた。彼らに近づき、寝袋に掴まらせて引き上げた。そうやって私たちは人命を救った。漁の安全性について、（そのような経験の数々から）たくさん学んだ。

船内のミラーと参加者の距離は近く、雑談や質問などが気軽に交わされていた。

ミラーが最初に私たちに示したのは、港を出る際、積み石でできた堤防に留まっていたワシである。「ワシがいる」と指し示したうえで、このあたりにはそんなにたくさんワシがいるわけではない、オスとメスでサイズが異なる、あれはハクトウワシ（Bald Eagle）だ、などそのワシについて彼が知っていることを参加者との会話のなかで説明したり、口笛で鳴き声をまねたりした。

港から離れると、海上から見えるキャンベル・リバーの町並みや、クアドラ島（ミラーの居住地）を指しながら、地理や先住民の文化について説明をした。その後「さて、クジラを探しに行こう」と、彼はクアドラ島南端を西から東に回り、海上に目を戻し、エンジンを加速させた。その際クジラについて次のような説明があった。

彼らは水面に上がってきて、それから潜る。ときに15～20分は潜っている。また上がってくると、潮を吹く。潮はときに7メートルにもなる。それを探しに行くんだ。

また、潮の干満と潮流、風の関係についても説明——潮の満ち引きによって潮流の向きが変わり、潮流と反対方向に強い風が吹くと大きな波が立つ——があった。

しばらく航行すると海上にいる海鳥（Seabirds）を指し、「ニシンなど、エサがたくさんいるところに集まる」などと生態に関する説明をした。その後しばらくすると、「アシカとウミガラス（Murre）がいる」と、海上から頭を出すアシカ数頭と、その近くに群れるウミガラスを指した。

#### 【11時25分：地点Bにてクジラの観察】

11時25分頃、彼は地点Bに到達し、そこで船を停めた。「海中に潜る尾ビレが見えた。ここで停まっていいかな？」と参加者に問いかけ、彼はエンジンを止めて参加者とともにデッキに出ると、クジラを探し始めた。

さっき尾ビレを見てから3分経った。（過去のツアーでは）長いときで22分の潜水を待った。（参加者：それからクジラが上がってきたの？）そう。おそらく2～3頭のクジラがこ

こにいるはず。彼らは全長 18 メートルにもなる。(参加者：いた！) みんな、あそこだ！

クジラが背ビレを海上に出し、潮を吹いて水中に向かい、最後に尾ビレを見せて潜るさまが繰り返されるのを皆で観察した。海上に背ビレや尾ビレが現れる時間が短いため、参加者ははじめうまくクジラを見つけられなかったが、しばらくするとクジラのペースをつかみ、目が慣れ、カメラで写真や動画を撮影しはじめた。ミラーも撮影に加わった(彼の写真は、社名で運用されているインスタグラムアカウントで見ることができる)。この頃からミラーは、業務と並行して無線で頻繁に連絡を取るようになった。

クジラやシャチを観察するときには船を最低 50 メートルは離し、エンジンを止めなければいけないという取り決めがある。そのため、ミラーはクジラから付かず離れずの距離を保っていた。クジラの移動に合わせ、エンジンをかけて追っては止まり、観察し、また追っては止まるのを繰り返す。クジラの潜水時間が長いと次にどこで浮上するか、参加者からすると予測がつかないため忙しく周囲を見回すことになる。ミラーが船を移動させる際も、双眼鏡を使いながら絶えず周囲を見回してクジラの位置を推測し、近づきすぎず見失わない位置を探しているようだった。彼はある程度の位置を推測したうえで停船する場所を決め、あとは参加者と同様にデッキでクジラを探す。視覚だけでなく聴覚も使い、背後からした潮を吹く音に反応し「後ろだ！」と私たちに指し示すこともあった。

また彼は、海面にほんのわずかな背ビレだけ見せて漂うクジラに対して、何度か角度を変えて近づきながら、次のように語った。

いまはエサを食べている。おそらくニシンだ、だから彼らは水面近くにいるんだ。ニシンは浅いところにいるから。彼らはここでぐるぐる(円を描くように)回っているんだ。エサを食べるために。次はあのあたりに上がってくると思う、回っているから。

また、ニシンが群れる場所には鳥も集まるため、鳥がクジラを目印になるとも話した。

はじめはクジラを見つけたこと自体を喜んでいた一行だったが、徐々に、海面に美しく尾ビレが立つ瞬間や潮を高く吹く瞬間を喜ぶようになった。ミラーのインスタグラムアカウントではこの尾ビレの写真が頻繁に投稿されており、ツアー中も尾ビレが立ちそうなタイミングで「ほら見てごらん！」「(2頭のうち1頭だけ尾ビレが立つと) 1 tail!」、あるいは「いまは尾ビレが見えなかったね」などと声をかけていた。尾ビレを出さずにクジラが潜ると、残念そうな声をあげる参加者も現れた。ミラーは尾ビレが立派に立った瞬間や、高く吹き上がった潮に虹がかかった瞬間など、折に触れて「美しい」と繰り返した。

#### 【12 時：地点 B から移動】

12 時頃になると、デッキから操舵室に戻り、地点 C に向けて航行をはじめた。ミラーは移動中も、途中でクジラを見かけると減速したり停船させたりして、泳ぐさまを船内から見る時間を作っていた。上述したように背ビレと尾ビレを交互に水面に出して泳ぐクジラに対し、「少なくともあと 1 回は海面に上がってくると思う」などと解説をする場面もあった。

#### 【12 時 30 分：地点 C 到着】



12時30分に地点Cに到着し、そこで船を止め、デッキに出た。ここでは船の周囲に数頭のクジラがいた。うち2頭は海面近くを漂い頻繁に潮を吹いており、ミラーは「眠っているんだ、昼寝」と説明した。そのクジラが動き出し、海中に沈んで参加者が「起きた？」と尋ねると、「わからない。（眠ったまま）深く潜るだけのこともある。彼らが起きるのはいつも突然だから、見逃さないようにしないと」と答えていた。クジラが再び姿を現すのを待つ間、彼はふと「今年の10月はとても暖かい。とても異常だ。雨も少ない。漁業、とくに川にいる魚にとって良くない。もっと水が必要だ」と話した。

ここでは地点Bのように特定のクジラを追うのではなく、より多くのクジラを見るためか、広いスポット内で船を幾度も走らせたり、10分以上停船して待機、観察したりが繰り返された。航行中、これまでで最も勢よく跳ね上がった尾ビレを見つけると、ミラーは急いでエンジンを止め「みんなおいで、あのクジラはジャンプする」と窓を開けて指した。実際にそのクジラは次の浮上で、海上に半身を躍らせてから勢よく沈むジャンプを見せた。そしてミラーは海中での動きを予測しながら「もう一度浮上すると思う」などと解説を続けた。また、潜水したあるクジラを見て「あのクジラは深く潜ってしまったと思うから、他の場所に移ろう」などと判断し、船を動かすこともあった。船にはGPSやソナーのようなものも搭載されていたが、ミラーはどちらかというと自身の経験や、無線からの情報に応じて船を動かす様子が観察された。

#### 【13時50分：地点D、Eへの移動】

13時50分頃、エンジンを停めてクジラを探していたとき、男性の声で無線が入った。それを聞いたミラーは「シャチがいる」とエンジンをかけた。そして、1人あたり20ドルを追加して支払えば、時間を延長してシャチを見に連れていけると参加者に打診し、追加料金はガソリン代だと説明した。参加者は全員承諾し、無線で知ったと思われるシャチの出現予定場所（地点E）に向けて船を走らせた。このとき無線からは複数人の声がし、シャチの出現場所では多くのツアー船が集結したため、複数の船の間でシャチの情報共有をしていたと推測される。移動中にミラーは、ナナイモ市にある生物学研究所が発行したこの地域のシャチの生態に関する資料をツアー客に回覧させつつ、シャチが母系家族であるという説明をした。2019年に公開されたこの報告書には、この地域に生息するシャチの個体のすべての情報（写真、個体間の血縁関係、背ビレの特徴など）が記載されていた。ミラーはそこに掲載されているシャチを自身も見たことがあることなどを話した。デジタルカメラで、自身が撮影したシャチの写真も見せた。

目的地に向かう途中、自然保護区に指定されているミトレナッチ島（地点D）を通過し、ほんの短時間だがそこでアシカの60頭ほどの群れを観察した。しかしミラーは「シャチを見なければいけないから早めに写真を撮ろう」とせかした。見た目がライオンに似ているからシーライオンと呼ばれる、オスがボスとなって群れ（colony）を率いる、あの最も大きい1頭がボスだ、などと簡単に説明したあと、参加者が撮影する間は無線で他の船と再びシャチについてやりとりをしていた。

#### 【14時20分：地点Eにてシャチの観察】

14時20分頃、地点Eに近づくと北の方角から3隻の観光船がやってきた。いずれもミラー

の船と似たサイズだったが、それぞれ異なるデザインだったため別々の事業者と考えられる。いずれの船も情報共有をしている可能性が高く、ミラーの船もふくめすべてが同じ方角に走り出した。ミラーは「ここからはゆっくり走ろう。海岸沿いに、大きな背ビレと小さな背ビレが見えるはず」と、親子のシャチを探していることを告げた。

しばらくしてシャチを発見すると、シャチのペースにあわせて並走したり、停止したりを繰り返した。他の船も同様である。先ほどの3隻のほかに新たに来た観光船が近くに停まると、ミラーはそれら別の船の事業者たちと会話を交わし、今日はどこに行ったのかと問われ「南のほうでクジラを何匹か見た。でもそこから、ここまでの間には何も見ていない」と話したり、「北東のほうで誰かがイルカを見つけたと聞いたけど」と尋ね、昨日誰それが見たという情報を得たりした。その船は近辺のリゾート・ホテルが所有するもので、オプショナルツアーとしてワイルド・ツアーを催行しており、男性の船長1人と、双眼鏡を携えた女性の参加者1人が乗っていた。他3隻の船は、遠目ではあったが複数人がデッキに座っているのが確認できた。その後リゾート・ホテルの船は他の場所へ移動し、ミラーの船をふくむ残った4隻は、互いに距離をとりながらシャチを追い続けた。

ここを泳いでいたのは事前にミラーがわれわれに回覧した生物学研究所の報告書に記載されている5頭のシャチだった。シャチは水面に背ビレを見せて泳ぎ、時折潮を吹く。そのなかでミラーは背ビレの形状と模様によって即座に個体識別をしていたらしく、5頭のシャチの関係性について、次のように語った。

（船を走らせながら）このあたりに5頭いて、3頭と2頭に分かれている。あそこに2頭いる、ここで停まろう。近づきすぎず、泳ぐままにさせよう。（停船）あの2頭は母と息子だと思う。（皆がデッキに出て2頭を眺めていると）あっちにもオスが1頭いる！（5頭の内訳は）母と2頭の息子、そして2頭の単身のメスだ。息子はメスにアプローチしているのかもしれない。だからあのオスが母から離れて、ほかのメスに近づいているんだ。

またあるとき、参加者にはただ泳ぎ続けているとしか思えなかったシャチに対して、こうも解説を加えた。

鳥が集まってきた、なにか殺して食べているのかも。だから鳥も集まってきたんだ。

### 【15時30分：地点Aへ】

そして「これが最後だ。みんな楽しんで！」と最後にシャチの近くで停船したあと、15時30分頃に港に向けて出発した。帰路では、近くを泳いでいたアシカ数頭の近くで減速し撮影時間を設けた程度で、他に特段のトークもなく航行を続けた。15時50分頃港（地点A）につき、皆が現金で20ドルの延長料金を支払うと、その場で解散となった。最終的に、予定を1時間半超過しての約5時間のツアーになった。

## 3 3つの点からの考察

以上のミラーのツアー状況をもとに、以下では2つの点から考察を行いたい。論点は、第1

に「ミラーのツアーでは、彼が元漁師である経験や事実がどう生かされているのか」、第2に「海洋環境の変化がワイルド・ツアー業に与えている影響はどういうものか」である。

### 3-1 漁業と観光業

ミラーのワイルド・ツアーにおいて必要とされる技能や知識は、おおよそ以下の3つである。第1に船の操舵を含め、安全に航海するための技術、第2に観光客に見せるおもな対象となるクジラやシャチなどの生態に関する知識、そして最後に、ディスカバリー海路やセイリッシュ海周辺の生態系に関する知識である。もちろんここに、宣伝をする技術（HPを開設したり写真をSNSにアップロードしたりする技術）や資金の管理術、または観光客に説明するための話術なども含まれるが、彼の仕事に直接的な影響を与えるのは上記3つだといってよいだろう。

そしてこれら3つの技術と知識を得るにあたり、彼の漁師経験がさまざまな局面で生かされているということを見てとることができる。

第1の操舵技術はいうまでもないが、2-3でふれた寝袋の利用はミラーが航海の安全を図る上で駆使した漁師の知恵の1つだといえるだろう。筆者らにミラーのツアーを紹介した知人はこの地域で活躍する現役漁師であり、過去に数回海に溺れた人物を捜索して探し出し、救助した経験をもっている。彼がいうに、溺れた人を見つけた場合は漁船にあるバルーンやタイヤを投げ、それに捕まらせてから漁船に引き上げる。その後、とにかく冷えた体を温めるために濡れた服を脱がせ、毛布や寝袋をかけるのだそうだ。ミラーの船は漁船ほど大きくはないため、筆者らが見たところバルーンやタイヤはなかった。しかし袋に入れた寝袋をバルーン代わりに掴ませることで溺れた者を船上に引き上げ、また冷えた体を温めるためにそれでくるむこともできる。ミラーが安全対策のために寝袋を積むのには、こうした漁師時代の経験が生かされている。

第2の点、つまりクジラやシャチなど海洋生物の生態に関する知識はどうだろうか。この点でまず指摘すべきは、ミラーが生物学研究所公刊のディスカバリー海路に生息する5頭のシャチに関する報告書を利用している点である。この報告書を彼が熟読し、またツアー客に見せることで、5頭のシャチそれぞれの識別や親子関係を把握することができる。

しかし、「ここのシャチは母と息子たちだ」とか「背ビレの模様がこうなっているのが母親だ」などの海洋生物学の知見は、彼がツアー客に説明する情報の断片でしかない。ミラーが実際に提供する情報は、「クジラは今おそらく眠っている」とか「クジラはあっちに泳いでいてつぎにあのあたりでジャンプする」とか「今ニシンを食べているのだろう」といった、ある種の「物語」である。そしてこの物語の構築は、漁師、とくにサケ漁師が漁場を決める際に欠かせない作業である。

筆者はかつて、この地域で2003年秋にシロザケ漁をやったあるサケ漁師の漁場決定と漁獲の記録をもとに、その漁師になぜその漁場を選んだかを尋ねたことがある（立川 2009: 187-93）。カナダ太平洋沿岸のサケ漁では刺し網かまき網という漁法が使われているが、この漁法の特徴は、1) 広い海原で魚群を追いかけて捕ることと、2) 魚群探知機を使わないので魚群の在処は船長の経験則と推測にもとづくことである。そしてここで筆者が強調したいのが、この推測というものが基本的には船長による（水面下の）サケの物語の形をとっているという点である。「泳いでいるサケがボデガ・ポイント（岬の名）にぶつかる」とか「サケはこのあたりにくるとぐるぐると周遊する」とか「ここを泳ぐサケはグラナイト・ポイント（岬の名）にぶつかる

だろう」、「いや、もっと北のほうを泳ぐだろう」という具合である。このような物語はただの推測ではなく、ハネ（jumper）と呼ばれるサケの行動（一定時間おきにサケが水上に飛び跳ねる習性）を目撃した後に作られる。そしてミラーもまた、クジラの位置や行動の推測に、同様の物語を作っている。彼はある地点でクジラが潮を吹くのを見たり、その周囲にいる海鳥を見たり、そのあたりの海底の地形を知っていたりすることからクジラの物語を紡ぐ。そしてそれをもとにクジラの居場所や行動を推測するのである。たまたまミラーはこの日、間違った物語を作成しなかった（つまり彼の推測はすべて当たっていた）が、実際には先述のサケ漁師と同様、間違った物語を作ることもあるだろう。しかしここで強調したいのは、このクジラの居場所や行動を推測するための物語を彼が作っていること、そしてその物語は漁師であれば誰でも作るものだという点である。

第3の技術、つまりディスカバリー海路やセイリッシュ海周辺の生態系に関する知識も、彼は長年この地域で漁をやってきたことから十分得ていると思われる。漁をしていれば、海鳥、カモメ、ワシ、クジラ、イルカ、シャチ、アザラシなどに頻繁に出くわす。ときにそれらの生物が漁網にかかり、漁船の甲板に上がってくることもある（筆者も2000年のサケ漁の際に漁船のデッキの上でアザラシとサメと対面した）。こうした長年の観察から、彼らが生態系を熟知しているのはいうまでもないことであろう。

最後に、漁師のネットワークをミラーが利用している点を指摘したい。われわれがクジラを観察していた際、急に彼が無線で誰かとなにか話を始めたことを思い起こされたい。もともとこれは、はるか北のほう（キャンベル・リバーの北西にあるロブソン・バイトという漁場）で漁をしていた漁師がシャチを見たという情報を彼に無線で流したことに端を発していることがのちにわかった。この漁師はシャチを目撃したという事実から、先述の「物語」および現地の環境に関する知識をふまえ、「そのシャチが〇時ころにはコーテス島とリード島の間の水域あたりに達するだろう」と予測した（もしかするとこの予測にはミラー自身の意見も含まれているかもしれない）。ミラーはその情報をもとに、「〇時までにはコーテス島とリード島付近まで到達すればシャチもツアー客に見せられる」という思いでわれわれにオプションを提案したと思われる。その後彼は他のツアー業者にもその旨を連絡しただろうし、また北方でツアーをしていた業者たちから「いまシャチは〇〇にいる」という情報をもらっていたかもしれない。このように、ミラーがかつて漁師であり、漁師を辞めたいまままだ漁師たちとネットワークを保持していることが、クジラやシャチの情報を得る上でうまく機能しているということができる。

### 3-2 環境変化に対する生業戦略

近年カナダでは、海水温上昇の影響から生態系の変化がみられる。顕著な変化のひとつが本来はるか南方のカリフォルニア湾に生息していたアシカの北上と常駐であり、カナダ漁業海洋省の科学諮問報告書（Canada, DFO 2023）によると、カナダの太平洋沿岸南部域にて越冬するアシカは2009～2010年調査では4,200頭、2017年調査では11,800頭であり、2020～2021年の平均個体数は13,600頭と推定されていた。つまりこの間、約3倍の増加をみせたことになる。すでに1990年代にはアメリカとカナダの国境水域、つまりフレーザー川河口あたりで夏を過ごすアシカの群れを見ることができたが、2010年代半ば以降になると、それより高緯度のキャンベル・リバー以北の地域でも大量のアシカが見られるようになったのである。

アシカの増加が社会にもたらす影響のうち、筆者らの調査でしばしば聞かれるのが漁業被害



である。筆者らの調査した限り、漁に最初の影響が出たのが2015年春のニシン漁業シーズン中である。カナダ太平洋でニシンはまき網という漁法で捕獲されるが、このときある漁船の仕掛けた網の内外に、ニシンだけでなく大量のアシカが確認された。このショッキングな事件はすぐさま地元のニュースで報道され、またその後もニシン漁のシーズンのたびに報道されている（e.g. Global News 2017）。被害にあうのはニシン漁だけではない。サケ漁やサケの養殖場で使用される網にも大量にアシカがかかり、網が破れる（そして網内のアトランティックサーモンが太平洋に流れ出る）、アシカが溺死するなどの事例が相次ぎ、サケの養殖場では侵入したアシカにサケが食べられる被害も生じている（筆者らによる漁師へのインタビューおよび（Cecco 2022）より）。

すなわちカナダ太平洋沿岸の人びとにとって、アシカの増加は自然環境の変化による生態系の変化の象徴のひとつであり、うち漁業関係者にとっては悪い影響をもたらす生物、つまり害獣として認識されているといえる。漁師たちがアシカを Sea Lion ではなく Sea Pig と揶揄するのもそれ故である。ミラーも漁師の経験があることから、同様の認識は共有しているものと思われる。その一方でワイルド・ツアーの現場では、ミラーが目当てのシャチに向かう途中にわずかながらも時間を割いて観光客にアシカを見せたことから、彼がアシカを害獣として排除するのではなく、観光資源として位置づけツアーに組み込んだことがわかる。つまり漁業という単一の生業では、漁師と害獣としてのアシカという対立関係に陥る可能性があった一方で、漁業と観光業を組み合わせた彼の生業戦略が、結果としてアシカを資源化し、アシカの増加に適応する余地を生んだと考えられる。

ただしミラーのツアーの主要な対象はあくまでクジラやシャチであり、アシカを資源化したことが彼の観光業にどれだけの経済的影響をもたらしているかは現時点で十分明らかではない。また、ミラーの事例だけで、カナダ海域におけるアシカ増加への適応可能性を論じられるわけではない。引き続きの調査が必要であるが、気候変動の影響により沿岸部の生態系の変化が世界各地でみられ、新たにやってきた生物が既存の生業（漁業）システムで扱いきれないために「厄介者」と位置づけられがちな現在の状況において、漁業と観光業を組み合わせたミラー氏の事例を通してそのような生物/生態系との関係性をいかに再構築しうるかを検討することは重要だと考える。またその分析にあたっては、「漁業」と「観光業」を対立的に区別するよりも、複数の特質をもつ生業をいかに組み合わせ、結果どのような生業戦略が生まれ、それが人と生態系の関係性にいかなる変化をもたらしているかを分析し、どのような適応がありうるかを探る視点が重要だろう。

#### 4 終わりに

本稿では、元漁師であるミラーのワイルド・ツアーの実態を通して、漁業と観光業の連関や、沿岸部の自然環境の変化に対する生業の適応可能性について検討してきた。

ワイルド・ツアーを含むいわゆるエコ・ツーリズムは、社会文化や自然環境の破壊をとまなうマス・ツーリズムへの反省をふまえ実践されてきた、地域や住民が主体となったオルタナティブな観光形態である。自然環境を対象とするエコ・ツーリズムでは、しばしばツーリズムの実践を通じた、自然と人の関係性が構築/再構築される過程やその帰結が問われてきた。たとえば菊池（1999）は、日本の環境庁がエコツーリズムの概念を正式に提唱した1990年代の段階で、

エコ・ツーリズムにおける「自然」が単なる自然地域ではなく、科学的知識によって保護地域として他の自然と差異化された対象が、市場経済に組み込まれ商品化されるというメカニズムを指摘している。そして「エコ・ツーリズムが持続可能であるために問われなければならないのは、当該地域の人びとが日常的な実践のなかで、自然や生物とどのようにかかわり、どのような認識をもち、どのような社会関係のもとに生活や生業を営んでいるか」であるとして、科学知や市場経済の論理だけに規定されないエコツーリズムのありかたを模索する必要性を示した。

菊池の議論はエコ・ツーリズムの持続可能性について問うたものであるが、気候変動をはじめとする様々な（予測不可能な）環境変動がローカルな人びとの生活や生業への影響というかたちで顕在化している現在、むしろ科学知や市場経済の論理、ローカルな生活や生業の論理などをいかに動員して自然環境と人の持続可能な関係性を再構築しうかが問われているといえる。沿岸部の生態系、漁師としての技能や知識、同業者のネットワーク、生物学研究所の報告書による科学知、世界各地から訪れる観光客のニーズなど様々な対象を資源化し、それを組み合わせながらワイルド・ツアーを構築し、実践を通して変動する沿岸部の環境と付き合いつづけるミラーの事例は、このことを考えるために多くの示唆をもたらすだろう。

## 参考文献

- Canada, Department of Fisheries and Oceans, “California Sea Lion Abundance Estimation in Canada, 2020-21.” ([https://www.dfo-mpo.gc.ca/csas-sccs/Publications/SAR-AS/2023/2023\\_016-eng.html](https://www.dfo-mpo.gc.ca/csas-sccs/Publications/SAR-AS/2023/2023_016-eng.html)) 2024 年 10 月 17 日最終閲覧。
- Cecco, L. 2022 “Thieving Sea Lions Break into Salmon Farm and Gorge on Feast Fish.” *The Guardian*, 2022/4/7 (<https://www.theguardian.com/environment/2022/apr/07/sea-lions-fish-farm-british-columbia>) 2024 年 10 月 17 日最終閲覧。
- Global News (Hour at 6) 2017 “Sea Lions Swarm Herring Boat.” (<https://globalnews.ca/video/3316230/sea-lions-swarm-herring-boat>) 最終閲覧 2024 年 10 月 18 日。
- 菊池 直樹 1999 「エコ・ツーリズムの分析視角に向けて―エコ・ツーリズムにおける「地域住民」と「自然」の検討を通して―」*環境社会学研究* (5), 136-151。
- 立川 陽仁 2009 『カナダ先住民と近代産業の民族誌——北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』御茶の水書房。